孤独な愛され女王蜂
１２

孤独な愛され女王蜂　１２

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19557739

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, 受けの浮気, ♡喘ぎ, 妊夫姦, 3P, テル霊, 律霊

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番はテル霊、律霊の３Ｐ妊夫姦です。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、受けの浮気あり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

孤独な愛され女王蜂　１２

子供も腹にいることだし、俺は警察の家族寮に移る事になった。
警察官はアルファが多いので、自然、配偶者はオメガが多い。家族寮はオメガのシェルターみたいになっていた。かなり厳重な警備のそこは、俺から見ても安全な棲家だった。
そろそろ引っ越ししようと思うことを相談所で雑談がてら話すと、たまたま手伝いに来てくれていた律くんが「身重の身体で荷運びはやめた方がいいですよ。……仕方ないな」と言って、荷物持ちについて来てくれることになった。

テルくんのアパートについて。

律くんに手伝って貰いながら、荷造りを進めていく。
「楽しかったな……」
テルくんと２人で住んでいた日々は、楽しい事ばかりだった。２人で買い物がてら出かけたりもして、随分と私物が増えてしまった。
俺はテルくんとお揃いで買った部屋着のスウェットを２つ目のボストンバッグにつめながら、ぽつりと呟いてしまう。
「……っ」
ずっと俯いてつっ立っていたテルくんが、みじろぎしてうめいた。
テルくんには一時的にだろうけど、寂しい思いをさせてしまうのが申し訳ない。
ああそうだ。
「テルくん、保険証返してくれ」
す、と手をテルくんに差し出す。
「は、」
どこか悪役みたいな風に顔を歪めて、テルくんがひきつった笑い声を上げた。
「あなたは、僕が素直にあなたに保険証を返すと思っているんですか？」
「？思ってるよ」

きょとん、と虚を突かれたような顔をした後、切なそうにテルくんは顔を歪めて、くるりと振り返って金庫から俺の保険証を出して来てくれた。
「あなたがそんなだから……僕は、僕たちは、悪役になりきれないんだ」
だが、テルくんは俺に渡す直前にぎゅっと保険証を握る。
「返して欲しければ、一回ヤらせてください」
「はぁ！？」
「でも、僕たちのことは嫌いにならないで」
迷子の子供みたいにささやくテルくんに、俺は思わず黙ってしまう。
「お願い、霊幻さん」
はぁ、と俺はため息をつく。その声にビクリと怯える
「……大事なテルくんをそんなことで嫌いになるわけねーだろ。フェロモンも無いオッサンのしかも孕んでる身体だけど、それで何かスッキリすんなら、使ってくれていいから」
テルくんを抱きしめて背中を撫でる。
「霊幻さん……好きです。行かせたくない」
「……ごめんな」
俺は自分からテルくんに口付けて、唾液を吸う。フリスクのキツいミント味がする。
が、それも口付けを続けていけば、お互いの唾液のどろくさい味に変わっていく。
後ろめたい、不倫の味だ。
ヨシフ、ごめんな。
俺はどうしても、この子たちの手を振り切ることが、できない。
激しい罪悪感とともに、何故か。
ひんやりとしたヨシフの手に、首筋を撫でられたような気がした。

──知ってるぜ、センセ。俺はみぃんな知っている。

そんな幻聴が聞こえて、俺はぞくりと背筋に氷が落ちた。
俺はもしかすると、とんでもなく怖い男の手に堕ちてしまったのか

もしれない。突然そんな気がした。
カリ、とテルくんに薬指の指輪を引っ掻かれて、意識が引き戻される。
「あ、そうだな、興醒めだな。外そうか？」
「いえ、そのままで」
す、と左手を口元に持って行って、ベロリと指輪を舐められた。
……律くんに。
「えーと、律くん？」
「まさか僕をほったらかしにして２人でヤるつもりじゃないでしょうね？」
ちょっと待て。妊夫プレイで、かつ３Ｐ？
……それはちょっとハードじゃないかなあ。俺は涙目でテルくんに助けを求める。
「大丈夫、仲間はずれにはしないよ。律くんも一緒に、僕たちの霊幻さんを気持ち良くしてあげよう」
蜘蛛の糸はあっさり切られた。
２人に引きずられるようにベッドに連行され、上半身のスーツはテルくんに、下半身のマタニティスーツは律くんにあばかれていく。
「霊幻さん、お腹さわっていいですか？」
ぽっこりと膨らんだ腹におそるおそる手を伸ばしながら、律くんが訊いてくる。
「ん、優しくな」
「分かってますよ。……あ、少し動いたかも。ふふ、パパですよ〜」
腹に頬擦りしながらそう言う律くんに狂気を感じてぞわっとした。
「……なんですか。父親が分からないんですから、僕かもしれないんでしょう？」
「そ、うだけど」
そうじゃない。
「じゃあ僕の可能性もあるんじゃないですか。お父さんですよ〜」
お腹をそっと撫でながら言ってくるテルくんに頭が痛くなってくる。
「……一応父親はヨシフなんだけど」

「「可能性がゼロなのに？」」
狂気の空間に字の如く気が狂いそうだ。
「……仰向けしんどいんだ。横になっていいか？」
「あ、すみません、気が付かなくて」
俺は右半身を下にして横になる。
その頭側にテルくんが、足元に律くんが座って、ベッドが大の男３人分の重さにギギッと悲鳴を上げた。
「ベッド大丈夫かコレ」
「あ、超能力で補強しながらしますね」
やっぱ大丈夫じゃ無いよな、ベッド……。
「霊幻さん、あんまり濡れてないな……」
この状況で濡れれる身体があるんですか！？
「ローション持ってます？霊幻さん」
「……引越しの荷物ん中だけど。ボストンバッグの左の方に入れたと思う」
持ってるんだよなぁ〜！！そういうところが駄目なんだよ、俺！！そういうところがビッチ卒業できない理由！！
「あったあった。これで痔にならずに済みましたね、良かったですね霊幻さん」
うんでも怪我するよりマシ。
「ぁ……っ」
冷たいローションが律くんのコンドームを被せた指で塗り込まれてきて、声が漏れる。ふと、目の前を見ると、バッキバキのテルくんの魔羅と目が合って、気まずくなった。
「その、フェラしよっか？」
「でもツワリ？とかしんどいんじゃないですか？えづくキッカケにはしたくないですし……うーん」
テルくんは少し悩んで。
「デコずりしていいですか？」
「デコずり！？いやまあいいけどさぁ、気持ちいいのか？それ」
「興奮はします」
にゅる、と亀頭のカウパーをおでこに塗り付けられて、ぞわっと倒錯的な悪寒が全身をかける。

「ん、う……」
ぬるぬると男根に眉間やコメカミ、髪の生え際を蹂躙される。屈辱感に俺が顔を赤らめていると、見上げたテルくんの顔は、征服感に紅潮していた。
「ぁ、ああっ、律くん、イくとお腹にひびくから、そこ気持ちいいからっ、触らないでっ」
「ええ？すぐ気持ち良くなるんだから、困った人だなぁ」
愉しそうな律くんの声。
「霊幻さんのおでこ、可愛いです。僕のでベタベタだ。ふふっ、かわいいなぁ」
興奮したテルくんの声。
──嬲(なぶ)られる、というのがぴったりだ。
「そろそろいいかな」
律くんが後ろから指を抜く。コンドームを装着して、ずぶずぶと背面から侵入してきた。
「ぁ、あ……っ」
ぞわぞわと這い上がってくる快感にシーツを掴む。
「……っ、ぶっかけますね」
みじろいだ俺の眉が、テルくんの鈴口をブラシのように擦った。
俺は顔中に精液をぶっかけられた。
「……髪にも、かけたなぁ……っう、落とし、にくいのにっ……っあ！」
横からぬちぬちと焦ったいほど優しく犯されて、声に熱が乗ってしまう。
「霊幻さんがイきまくらないように、イイところは外してピストンしますね」
「ン……っ」
そうなってくると、ごりごりと擦られる入り口の神経が過敏になってくる。
「霊幻さん、口閉じないで。可愛い喘ぎ声いっぱい聞かせてください」
「ぁぐっ、ふぇるふん……っ、は、ぅ……」
テルくんの指が俺の唇をこじ開けて、そっと精液を塗り込みながら

舌をすりすりと撫でる。
上から下からじれったい責められ方をして、身体が切なくて腰が揺れる。
「んぁっ……あぁっ、もっと……っんぅっ」
「すぐ激しくして欲しがるんだから、淫乱だなぁ」
律くんがくすくす笑いながら、でも深くゆっくりと陰茎を擦り付けてくる。
「あぁああ……っ！」
「我慢しましょうね、お母さん」
テルくんの言葉に、かっと訳の分からない苛立ちで反論したくなる。
「んぁ……っ！」
でもそれは、じわじわとしたせり上がってくる麻痺感でかき消されてしまった。
「イっ、イく……っ！」
じわわわ、と染み渡るように甘イキした。きゅん、と少しお腹が張る。
「……っく」
律くんが呻いて、さっと抜いてゴムを外す。
「忌々しい……！」
身体を起こした律くんは、俺の左手を取って、ちんこを指輪に擦り付けながら射精した。
「え」
あんまりのことに唖然とした俺は律くんの顔を見てはっとする。
「律くん、おまえ──」
「言わないでください」
泣きそうな顔をした律くんは、身体を曲げて俺にゆったりと口付けた。
その秘めた想いに、俺の心が同情して痛くなる。
「言葉にしないで。言霊を込められてしまったら、きっと僕たちは、あなたをこの部屋に閉じ込めてしまうから。……僕たちあなたに決定的に嫌われるようなことはしたくないんです」
「……分かった」

この子たちは、ギリギリのところで踏ん張ってくれているのだろう。おそらくは俺のことを思って。それは大事にしてやりたい。
「霊幻さん、もうぐちゃぐちゃだなぁ」
苦笑するテルくんが、律くんに目配せする。
２人は場所を入れ替えて、俺いじりを再開した。
「すぐ挿れても大丈夫ですか？」
「ん、」
テルくんの言葉に頷いた俺の、
「ああっ！」
ちんこを、パクッと横になった律くんが咥えた。
「大丈夫ですよ、やんわり責めますから」
テルくんの言葉にこくこくと頷く律くん。
「そん、な、こと、言った、って！」
ゆるゆると追い詰められる俺はそれどころではない。
快感の萌芽が腰から全身に散らばり続けているのに、決定的なものが与えられないもどかしさ。
「あっ、ふぁっ、」
ぬ、ぬ、とゆっくり犯される後口。
「やっ、っあぁ！」
ただ温めるように口の中でしゃぶられる敏感な性器。
「〜〜〜〜っ♡♡♡」
それは突然キた。ぷつん、とじれったさが突然崩壊して、深い絶頂の波にさらわれる。
「あ……♡あ……♡」
うっとりとして解放感に浸ってしまう。
「え、イきました！？……っく、絞られる……ッ！」
テルくんが唸って後ろから抜き、また精液を指輪にぶっかけた。
……流行ってんの？ソレ。
「……この指輪は僕たちの精液も知ってるんですねぇ」
くすくす笑う律くんに、ちょっとぞっとした。
「はー、やっぱり霊幻さんはイイなぁ……」
俺がティッシュで顔の精液を拭いていると、どさりとテルくんが隣に倒れ込んでくる。

「……行かせたくないなぁ」
つうっとテルくんの目から涙が溢れて、俺の胸が締め付けられる。
「また一緒にご飯食べようぜ。遊びにも行こう？だから泣くなよ、テルくん」
ピタっとテルくんの涙が止まって。
「「霊幻さん、そういうところがビッチなんですよあなたは。そういうところが駄目」」
何故か２人にダメ出しされた。

※

「おー、遅かったな」
ヨシフの待つ部屋に律くんとテルくんを連れて入る。
「あ？」
ヨシフはくん、と鼻を鳴らして、それから黙って悪そうに笑った。
「──楽しかったか、センセ？」
俺は飛び上がりそうになった。シャワーは念入りに浴びてきたはずなのに。
あれ。
そう言えば、ネクタイピン、ヨシフが入れ替えたままだったような……？
「これからも楽しい相談所での生活が待ってるんですから、心配しなくていいですよ、霊幻さん」
にこやかにテルくんが俺の腰を支えながら言う。
「僕たちが寂しい思いをさせません。──また旦那さんは寂しい思いをさせるでしょうけども」
俺の手を取って指輪を弄る律くん。
もしかしなくてもヨシフを挑発してんな！？止めてくれよ！
「ブンブンブンブンうるせえ働きバチどもだな、霊幻？」
やめろヨシフも俺に話しかけるな！お前らだけでやってくれ！！

続

「いつまでも女王蜂が自分達の巣にいてくれると思い込んでやがる」

く、と火のついてないタバコを咥えた唇が、かすかに笑った。

続